

# 『四天王剿盜異録』と『善知安方忠義伝』

大 高 洋 司

要 旨 互いに内容の近似した曲亭馬琴の読本『四天王剿盜異録』（前・後編一〇卷一〇冊、文化三年一月、鶴屋喜右衛門刊）と山東京伝の読本『善知安方忠義伝』（前編六冊、文化三年一二月、鶴喜刊）の關係について、稿者自身の旧稿「京伝と馬琴―文化三、四年の読本における構成の差違について―」、「読本研究」第三輯、平成一（一九八九）・六を大幅に訂正しながら再説し、類似は両作の間のみならず互いの周辺作にまで広がっていることを指摘して、寛政中から文化四年に至る京伝・馬琴の読本の制作・刊行は、そこに版元をも加えた両者の談合を前提としているのではないかとの仮説を提示した。



曲亭馬琴の読本『四天王剽盜異録』（前・後編一〇巻一〇冊、文化三（一八〇六）年一月、鶴屋喜右衛門刊）と山東京伝の読本『善知安方忠義伝』（前編六冊、文化三年一二月、鶴喜刊）の間に、偶然と見なすにはあまりにも近似し過ぎた構想・文辞が見出されるのは、周知のことである。この点について、小池藤五郎氏は、早く「〔善知安方忠義伝〕は、適々『四天王剽盜異録』が刊行され、将門に取材してゐるを見、それに対抗する意味で本書を刊行したものらしく、同様に将門の滅亡に端を発する」（『山東京伝の研究』、昭和一〇（一九三五）、岩波書店、四六二頁）と指摘され、近年の『山東京伝全集 第十六巻 読本2』（平成九（一九九七）、ぺりかん社）の『善知安方忠義伝』解題（徳田武氏）でも、より具体的かつ直裁に

本作は、……藤元元撰『前太平記』に記される平将門とその遺児如蔵尼・平良門との記事を世界としているが、それより前、文化元年冬に稿成り、同二年九月に割印を許され、同三年正月に同一の版元鶴喜から刊行された、曲亭馬琴の『四天王剽盜異録』がやはり『前太平記』の天慶の乱の後日譚を世界としているので、すでに馬琴と読本を競作する状況に入っていた京伝は、鶴喜から馬琴の動静を聞き知ることなどもあつて、『剽盜異録』に刺激を受け、同様に『前太平記』を世界とする作品を著わすことになった、と思われる。

と指摘される。

このように、先学においては、その点を強調されるか否かはともかくとして、「近世小説史上、最も華々しい見ものである」（中村幸彦著述集第四巻『近世小説史』（昭和六二（一九八六）、中央公論社）第十章「後期読本の推移」、

四二四頁）両者の確執が、この時点ですでに明白であるという立場からの立論が、現在なお圧倒的に優位であるように見受けられる。私自身は、もうずいぶん長い間、京伝・馬琴の読本をこのように論じることには懐疑的なのであるが、かつて、通説の圧迫と何とか折り合いをつけようと、右両作を含め、専ら京伝・馬琴の文藝的力点の置き方の差異を強調する方向で、この時期の両者の読本の特質を論じようとして、うまく行かなかった苦い経験がある（『京伝と馬琴——文化三、四年の読本における構成の差違について——』、『読本研究』第三輯、平成一（一九八九）・六）。

この時重きを置くべきだったのは、実は両者の差異といったものではなくて、むしろ類似性であることに気づいたのは、ごく最近になってからのことである。この方向で論じてみた方が、これまでもうひとつ腑に落ちない点のあった文化三、四年頃の両者の関係を把握し易くなるのではないかというのが、現在の私にとっての基本的な認識となっている。十数年前の失敗作に、いまだにこだわっていることをお嘆き下さい。しかし、この点にきちんと整理をつけておかないと、江戸読本の文芸様式についての議論は、その形成をめぐる非常に重要な部分で、あいまいさを残したまま、結局のところ、馬琴の立てた自己中心の読本史観を無批判に継承することになってしまう。

ここでは、如上の問題意識に基づき、『四天王剿盜異録』と『善知安方忠義伝』を主たる対象として、前稿とは逆の方向から論じて行くことを了とされたい。

## 二

両作の類似点を問題にする際に、誰もがまず思い浮かべるのは、前述のとおり、共に『前太平記』（元禄年間刊）を主要な取材源とすること、である。『四天王剿盜異録』は、『前太平記』巻第六に描かれる「将門の滅亡に端を発」

（小池氏）して、その際に滅びた権守興世の妾腹の子、成長して藤原（袴垂）保輔が、源頼光及び配下の四天王に誅戮されるという展開をとる。一方『善知安方忠義伝』は、「平将門とその遺児如藏尼・平良門との記事」（徳田氏）に基づき、これ対峙する源家の武将は、頼光の弟にあたる源頼信である。

京伝は、典拠とするにあたつて『前太平記』の野史としての性格をはつきりと認識しており（「良門の事跡は前太平記に少しく録せり。かの書は近世の書なれば、たしかに実<sup>まこと</sup>とおぼえがたし。」「善知安方忠義伝」〔附言〕、恐らく馬琴もそうだったと思われる<sup>（1）</sup>）。その上で二人は、『前太平記』を実に良く読んでゐる。挿話や文辞の利用の間の良さは、四十巻全体の流れを十分に把握した上でのものと思われる。利用の一々については、すでに整理が備わっている<sup>（2）</sup>ので、それらの指摘に従つて当該部分を較べ合わせてみれば納得のいくことなのであるが、これまで言及のなかった点について、ひとつだけ例証を追加しておきたい。

それは、『前太平記』巻第十五・十六に登場する、美丈丸の一件である（巻第十五「美丈丸縦逸并勘気事」「美丈丸赴横川并幸寿丸替命事」「法華三昧院建立事」、巻第十六「源満成卒去事付源賢阿闍梨再父子対面事」）。

—美丈丸は多田満仲の四男で頼光（次男）の弟。退隱を願ひ、仏法に心を委ねる父の命により、一五歳で中山寺に預けられるが、放縦にして修行を嫌い、罪の無い人民を傷つけ、殺害するようになる。人々の訴えに驚き怒った満仲は、家臣藤原仲光に美丈丸の首を討つよう命じる。仲光は美丈丸を横川の源信少僧都の許に落ち延びさせ、身替りに一子幸寿丸の首を差し出してその場をしのぐ。仲光の北の方は、悲しみに目を泣きつぶす。

三年後、満仲の長子満成が没し、横川の源信が導師となる。中陰が果てて後、源信は我が弟子として、修行にやつれた源賢阿闍梨こと美丈丸を満仲と対面させる。事情を知った満仲は、仲光を賞し、我が子が存命して善智識となつたことを源信に感謝する。北の方も、思わざる再会を夢かと喜ぶ。源賢は幸寿丸の菩提を弔ひ、一寺を建立して住持

となる。――

この挿話は、実は『四天王剽盜異録』にも『善知安方忠義伝』にも直接取られてはいないのであるが、しかし馬琴・京伝に強い印象を与えたことは確かである。まず『四天王剽盜異録』の方から。前・後編とも巻末に附載する「僊鶴堂藏版目録」中に本作全十冊の広告が載り、続いて「同拾遺／曲亭著／全五冊 美女丸一代の奇談軍記」にもれたる事をする。近刻とある。この「美女丸」は恐らく「美丈丸」のことであり、馬琴は右の一件を敷衍して、なお「拾遺」編をものしたいという気持ちがあったものと思われる。『四天王剽盜異録』で主人公格となった藤原（袴垂）保輔は、『前太平記』（巻第十七）では藤原致忠ともたけの四男で、源頼光とも近い保昌の弟である。その保輔が、「其心飽くまで姦凶にして」（藤原保輔同斎明事付匡衡手負季孝横死事）、甥の斎明を語らい、盜賊の頭となって権力に歯向かい誅罰されるという挿話は、上記多田満仲の四男美丈丸の所行、

凡そ虎生まれて三日、牛を喰らふ氣あり。美丈十五歳にして、人を殺すことを好む。此心、又改むること能はじ。改めずんば日々に悪行超過して、殘賊とが蠹害がいの癖者と成つて、先祖の名を汚し、子孫の面を辱めん事、掌たをこうを指すに似たり。（『美丈丸縦逸并勘氣事』、叢書江戸文庫版の本文に拠る）

に通うものであり、『前太平記』において、美丈丸・保輔は、源家にとって一種「獅子身中の虫」、別の言い方をすれば、名家における不条理の体现者として文学的想像力を掻きたてる、好一对であった。『四天王剽盜異録』第四綴で武藏権守興世の子を孕んだまま、藤原致忠の側室となつて一子隴丸（保輔）を産み、事現れて致忠の許を離れた女性節折よおりに、「母子が生涯の吉凶」を問われて、加茂保憲の妻妙藏比丘尼の言う言葉、

（恩愛の覇を）脱離せんとらば、はやくその児を棄つるにあり。尼今その児を相するに熊虎ゆうこの形にして、豺狼さいろうの声あり。……もしこれを養育せば、成長の、ちかならず九族に禍すべし。

は、朧丸のその後を予言したものであり、節折はそのまま朧丸を棄てて尼に仕えることを決意するのであるが、『前太平記』の保輔関係の記事には文言の上でこれに類似する箇所はなく、むしろ右の美丈丸をかすめたものと見るべきであろう。

しかし『四天王剿盜異録』で注意すべき点は、前述のように、『前太平記』の保輔があくまでも致忠の四男坊であるのに対して、こちらでは、実は武蔵権守興世の子であった、という脚色が加えられている点である。そのために、敵は源家の縁者ではなく、将門側の血筋を引く者だったということになり、本作では、保輔に変化・迹形・死活の術と共に謀反の志をも伝えた道魔法師（第十四綴）や、同じ回から登場する妖童鬼同丸（土蜘蛛）をも含めて、善（頼光四天王とその周辺）と悪（将門・興世・保輔・道魔・鬼同丸）の対立が明確化されている。前稿では、この対立が作品構成の核の部分を形成するものと見て「梓組の強調」と申し述べたのであるが、それは、馬琴の読本において勸善懲惡の図式が明確であるということにはなっても、これを本作の〈読本的梓組〉<sup>3</sup>そのものとまで見なすことには、いささか無理がある。詳しくは後述するが、まずはお詫びして、この表現を撤回しておきたい。

続いて『善知安方忠義伝』における美丈丸の挿話の投影に、論を及ぼしたい。本作では、美丈丸の名は、巻之五末尾に後編の粗筋を簡略に述べた中に、「美丈丸道心源賢阿闍梨の道德により肉芝仙蝦蟇の術やぶれて滅亡し、靈魂石と化し世にこれを蝦蟇石と称<sup>しやうす</sup>る事」として見えている。前述のように、「美丈丸道心」と「源賢阿闍梨」は同一人物であるから、このように分けて書いてある理由は分からない。直接的な言及は、他には一切ないのであるが、しかし私は、美丈丸の挿話は、『四天王剿盜異録』におけるよりもさらに深いところで、本作の内容に影響を与えていると思う。その点を、源家の武将源頼信の形象に即して見て行きたい。

【四天王剿盜異録】における頼光四天王のエピソードが広く人口に膾炙しているのに対して、『善知安方忠義伝』

における頼信・良門の組合せは、晩年の近松が浄瑠璃『関八州繫馬』（享保九年（一七二四）初演）に仕組んではいるとはいえ、やや特異といえるかもしれない。<sup>(4)</sup>ところで『善知安方忠義伝』第八条には、この頼信が、「いかなるゆゑにや、近曾俄に心かはり、淫酒に耽り驕奢に長じ、佚遊宴楽にのみあかしくらし」、諫言した家臣藤六左近輔相<sup>すけみ</sup>を手討にするという話がある。この挿話は、将門方における六郎公連<sup>きんつら</sup>の諫死（第一条、『前太平記』巻第一「将門僉議事付公連諫死事」に基づく）、良門に対する善知安方の諫死（第四条）、同じく鷲沼太郎則友の諫死（第十三条）に対応しており、頼信は、心を改めない将門・良門とは対照的に、藤六左近の死と引換えに正氣に戻るが、これは肉芝仙の蝦蟇の妖術に心を晦まされていたためということになっている。私は、この乱心の挿話は、ひとつには『前太平記』巻二十三「千手丸誕生事」において、二六歳の頼信が、一条天皇の官女に恋煩いするという挿話に導かれたものと考ええる。結局この恋は天皇の叡聞に入って婚姻が叶い、やがて千手丸（源頼義）が生まれるのだが、武将としての頼信の活躍は、東国における平忠常の乱平定を中心に、当然描かれるものの、名実共に源家の統領に相応しい英雄的性格を多分に持つ頼光と比較した時、一種線の細さは否めない。京伝は、その点をすかさず利用したものであろう。

しかし恋煩いは、「乱心」ではあっても、忠義の臣を手討にするという方向の狂気には結びつかない。ここにはやはり、美丈丸の挿話の影を認めるべきであろう。そもそも、『善知安方忠義伝』の主要登場人物は、善知安方にせよ、如月尼（滝夜叉）・良門姉弟にせよ、美丈丸の挿話を意識して眺めた時に、性格的陰影が一層際立つと言って良い。勿論近代小説的葛藤というのではなく、善玉・悪玉の入れ替わりといったレヴェルで言うのであるが、登場人物の誰もが全能ではなく、己の内側に悪を見出した者が、それに対する呵責に耐え、また実際に墮獄して呵責を受けながら、それゆえにこそ、我が身の悪を悟り得ない者に対して、生き替わり死に替わり諫言を続けるという面白さ。やや大げさに言えば、美丈丸の挿話に見られる狂気と仏心の相克を、京伝は確かに読み取って応用しているのであって、その



意味で、『善知安方忠義伝』は、『四天王剽盜異録』より大人の世界を扱っていると言えるかもしれない。ただ、これも善悪は己が心にありという勧善懲悪の文芸化の方向の問題であって、前稿で「梓組の弱体化」などと申し述べて終わっているのは、これまた撤回して再論させていただきたいと思う。

なお、美丈丸は、ついに両作の登場人物とはならなかった。出せば既刊行分と同工異曲とならざるを得ないのだから、予告のみに止まったことを正解と評しておきたい。

さて、ここで改めて冒頭に戻り、『四天王剽盜異録』と『善知安方忠義伝』における馬琴・京伝「競作」の問題について論じてみたい。同じ典拠作の同じ出来事から出発して、共にその「後日譚」(徳田氏)を取り上げており、しかも典拠の利用は、互いにほとんど重なりあうことがないというのは、先に引用した徳田武氏の言のように、「すでに馬琴と読本を競作する状況に入っていた京伝」が、「鶴喜から馬琴の動静を聞き知ることなどもあつた」からだろうか。『四天王剽盜異録』と『善知安方忠義伝』は、共に仙鶴堂鶴屋喜右衛門の単独版であるから、鶴喜は両作の文字通りの版元である。この点に関連して、高木元氏の「京伝と馬琴とによる競作状況は、江戸読本を流行させるために板元である鶴屋喜右衛門が意図的に演出したものと考えるべきではないだろうか」という、すでに良く知られた発言を、併せ考える必要があると思う。しかし私は、書肆の関与について、(高木氏の意図を正しく受け止めていないことを恐れるが)人気作者京伝・馬琴の新作を一手に引き受けた鶴喜が、両者の間で上手く立ち回り、互いのライバル意識を煽り立てて、作者の緊張感と共に、読者の期待感を一気に高めようと目論んだ、というようなあり方とは、もう少し違った方向で考えている。この問題を含め、続いて両作の長編構成を支える〈読本的梓組〉を抽出しながら、やや考察を深めてみたいと思う。

正直なところ、『四天王剽盜異録』の読本的枠組について、私はずっと誤解し続けてきた。藤原（袴垂）保輔を主人公とする悪漢小説だという思い込みがまずあり、その悪漢が妖術を身につけることによって善悪の振幅が大きくなり、作品世界の拡大がもたらされ、同じ構図が『椿説弓張月』に受け継がれるというふうに考えていたために、この作品の内実を、妖と徳の対決というかたちに抽象化して受け取り、それを読本的枠組にまで及ぼして済ましていたのである。保輔にかかわる部分についてそのように考えることは、今でも間違いとは思わないが、しかし、本作の読本的枠組は、別のところに求められる。ポイントになるのは、前節に引用した、妙藏比丘尼が保輔（臙丸）の生母節折に語った予言の言葉（第四綴）である。「この子供は成長の後、熊虎豺狼の性質を露わにして人々に仇をなす」との予言に従って節折は臙丸を捨て、六郎二・榎木夫婦に拾われた臙丸（弥介）は、悪事を重ねたあげく、悪人の養父と罪のない義妹を死に追いやつて去る（第五・九綴）。上京した弥介は、和泉式部、次いでその夫で義兄の藤原保昌（父致忠はすでに逝去）にめぐり合い、左京亮保輔と名のる（第十綴）。——このような経緯を辿って、後半は、先に紹介した『前太平記』の挿話を踏まえ、また頼光四天王等も直接絡む展開となるが、今問題にしておきたいのは、クライマックスの誅戮に先立つ、第十八綴の後半に挿入された、次のようなエピソードである。

——保輔は、嵯峨の尼寺慈心寺の観音像に細工して信仰を集め、その後寺に押入って賽銭を奪おうとするが、住持画仏尼の厳然とした応対に気圧されて逃げ帰る（「われ三十年來賊をなすといへども、この寺に入りし程おそろしと思ひしことはなし」）。その後、同宿の比丘尼の一人説石尼が、保輔は我が子弥助と語って嘆く。画仏尼も来し方を語り、

説石尼が後を続けて、保輔（弥助）をめぐる二人の話は一本化する。

はじめわれ妙藏尼の教に倅<sup>もと</sup>り、臙丸を殺さずして、終に禍<sup>わざはひ</sup>を御身にうつせし事、羞るになほあまりあり。……

尼今夜保輔を相するに、已に死相をあらはしたり。是皆過世の因果なりといへども、……保輔誅戮せられなば、三縁こゝに解脱して、夙願成就すと思へば、よろこばしうこそ侍れ。

画仏尼は節折であり、説石尼は樁木である（妙藏尼はこの間に遷化）。画仏尼（節折）は、遡つて第十三綴に、それと明示せず、保輔の毒手から美女姫松（頼光の侍女で、卜部季武と不義の疑いによる辛苦を経て妻となる）を救つてもいる。つまり、『四天王剿盜異録』の保輔（臙丸・弥助）譚は、将門の滅亡に際して戦場を逃れ、都に伴つた藤原致忠を刺そうとして果さず、岐<sup>き</sup>路<sup>ろ</sup>に我が子を捨てて、妙藏尼に従い、仏道修行に後半生を送つた節折（画仏尼）の物語の中に、スッポリと包み込まれていることになる。妙藏尼の予言と、後半は節折によつて語られるその終焉とが、『四天王剿盜異録』の読本的枠組である。やや紛らわしいのが、『雨月物語』の「青頭巾」を利用するところのあ

る、岐<sup>き</sup>路<sup>ろ</sup>寢覚の里の人喰いの姥（第二、三綴）で、第三綴には、  
この時妖婆<sup>そば</sup>が怨霊、三歳の小児（注、臙丸）に縁<sup>まつり</sup>しより、この児成長に及びて、愛<sup>あい</sup>欲<sup>よく</sup>貪<sup>ひん</sup>婪<sup>らん</sup>のこゝろ起り、終に剛盜となりて、残悪を<sup>ほし</sup>抜<sup>は</sup>にし、身を白刃の下に亡せるかとおもはれける。  
そまがおりやうつく おまゝなるに ず ワガモノヲ、シミ ヒトノモノヲホシガル

の一節が、七ウ・八オの挿絵（詞書「妖婆冤魂憑<sup>よまがおりやうつく おまゝなるに</sup>」臙丸・図）と共に載るために、やや幻惑されるところがあるのだが、この「妖婆」は、作品全体として見れば、ここまで従つて来た致忠の忠実な従者と格闘し、共に谷底に落ちて死ぬことで、節折の話に新たな局面を用意し、また保輔の養父六郎二が、後の碓井貞光（四天王の一人）の父親を殺害するきっかけとなっているに過ぎず、後の展開にそれ以上の影響力を持つことはない（こうした中途半端な描き方は、馬琴としては失敗と思われる）。

第二十綴に至り、節折（本作）の枠組は、次のようなかたちで完了する。

ア 説石尼は保輔の首を盗み、娘深雪の墓に合葬、事情を了解した頼光朝臣は黙認する。

イ 終焉の期を悟った画仏尼（六九歳）は、書写山の性空上人に導師を依頼する。

ウ 藤原保昌は、父致忠の遺命を伝えるため、妻和泉式部を遣わすが、それを察知した画仏尼は、式部との面会を拒む。

エ 到着した性空上人は、「くらきより」の歌を詠んだ式部を伴う。

オ 上人との偈の応酬があつて、画仏尼は遷化する。

カ 頼光朝臣・四天王・保昌・満仲朝臣の略伝。源家は繁栄する。

ウ・エの続き具合にもうひとつ不明瞭なところがあり、何か典拠が見出せるのかもしれないが、<sup>(9)</sup>ともかくも、アゝ力を通読して了解されるのは、節折の枠組、すなわち本作の読本的枠組は、女人往生伝の形態を取っているということである。

ところで『四天王剽盜異録』は、馬琴の半紙型読本の四分類（仇討もの）（伝説もの）（巷談もの）（史伝もの）のうち、（伝説もの）に含まれるとするのが、一般的な理解であろうと思う。<sup>(10)</sup>横山邦治氏は、この四分類を「読本」ジャンルの中核をなす（稗史もの）の分類基準に引き上げ、（御家騒動もの）を付け加えられたが、<sup>(11)</sup>『四天王剽盜異録』の扱いについて変化はない。私も（御家騒動もの）<sup>(12)</sup>以外については、ほぼ横山氏の分類基準を踏襲してきたが、ただ、恐らくは作品の内容から漠然と感じられる印象に基づいて近代の研究者の立てたこうした分類を、必ずしも作品の素材によるものとせず、読本的枠組の施し方によって決定される作品構成の型として捉え直すべきかと愚考し、実践を試みている。<sup>(13)</sup>現在、（仇討もの）（巷談もの）（史伝もの）については、従来の分類基準は、作品構成の型とほぼ合致

するものと見なして良いと考えているが、〈伝説もの〉については再考の必要を感じている。私は〈伝説もの〉を、〈仇討もの〉の発展形態で、馬琴主導で考案され、一代では尽きない因果応報を盛り込むために物語全体の時間的尺度が長く取られており、文化三、四年刊の〈稗史もの〉に、典型的に現れる型と定義してきた。文化三、四年刊の馬琴の読本がこの型を多く採用することは誤りではないが、しかし、『四天王剽盜異録』は、見てきたように、明らかに右の定義に当て嵌まらない。<sup>(14)</sup>代わって浮上して来るのは、長編仏教説話（勸化本）に基づく上方読本の〈一代記〉流行りが、この時期江戸読本の長編構成に大きな影響を与えたという、中村幸彦氏の生涯唱え続けられた御説である。<sup>(15)</sup>現在典拠作を特定できずにいる（あるいはその必要はないのかもしれない）が、『四天王剽盜異録』における読本的枠組の施し方は、まさしく中村説の方を向いている。本作は、中村説に従って、江戸〈稗史もの〉の下位項目にもうひとつ〈一代記もの〉の項を追加し、ここに含めるのが適当かと思われる。

ただし、往生によって完了する節折の〈一代記〉を縦軸としているとはいっても、『四天王剽盜異録』の興味の中心は、述べてきたように、その中に包み込まれた善悪の対立といつて良く、節折の往生が、それらを共に止揚してしまふ、というのではない。節折の〈一代記〉自体も勿論創作であり、その意味で『四天王剽盜異録』の内実は、上方の〈一代記〉に較べてずっと創作性の強い、〈擬・一代記〉と言って良いかもしれない。このように規定した時に、『四天王剽盜異録』と同じく〈擬・一代記〉としての内実を備えた読本が、同時期、山東京伝にもあることに気づく。『桜姫全伝曙草紙』（文化二年一二月、鶴喜刊）がそれである。『桜姫全伝曙草紙』の読本的枠組は分かりやすく、第三で桜姫の母野分の方に惨殺された白拍子玉琴の怨恨（第十九で復讐を遂げ、解脱）なのであるが、この作品を分類しようすると、〈仇討もの〉にも〈伝説もの〉にも当て嵌まらない。横山邦治氏は、〈御家騒動もの〉として論じておられるが、私は、本作には御家騒動の要素がほとんど含まれないことを、指摘したことがある。<sup>(16)</sup>今、『四天王剽盜

異録』について述べてきた事柄を敷衍して、『桜姫全伝曙草紙』の基本プロットに言及すれば、本作は、仏教長編説話『勸善桜姫伝』を利用しながら、女人往生伝を裏返して、稀代の悪女野分の方の一代記（裏には常に玉琴の怨霊がいる）を設定し、その内側に桜姫・清玄譚を組み込んだ（擬・一代記）である。もう少し内側に目を向けて、『四天王剿盗異録』の節折・保輔母子、『桜姫全伝曙草紙』の野分・桜姫母子を比較し、前者の母（善ないし善悪超越）／息子（悪）に対して後者の母（悪）／娘（善ないし善悪超越）、という対応関係を抽出することも可能かもしれない。加えて、『曙草紙』の野分の方の形象化にあたっては、馬琴読本『石言遺響』（文化二年正月、中川新七刊）の悪女万字（まじ）前が参照され、<sup>(19)</sup>その背後には、ここにも仏教長編説話『小夜中山霊鐘記』があることは、<sup>(20)</sup>もはや斯学の常識である。両者のこうした類似の拠って来るところは、やはり改めて一考する価値があるであろう。

#### 四

京伝読本『善知安方忠義伝』との類同性を有する馬琴読本『四天王剿盗異録』が、同じく京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』とも近似した点を持つことを述べたが、『善知安方忠義伝』についても、『四天王剿盗異録』以外の馬琴読本に対して、同様のことがある。ただ、私は前稿において、本作の読本的枠組についても、『四天王剿盗異録』と同様の理由で誤認を犯したままなので、これを正しく把握し直した上で、然るべき道筋を経て結論に辿り着きたいと思う。

『善知安方忠義伝』の作品構造を見極めようとした際に混乱を来たす一因は、本作中に、『四天王剿盗異録』の保輔が道魔法師から受け継いだ（術）よりもさらに強力な力なたちで、蝦蟇の術を用いる肉芝仙が登場し、しかも良門がこの術を習得して、姉の如月尼までも謀反の大望に巻き込んでしまうという点である（第三、四条）。妖術の効力は、

その後繰り返し語られるので、私は前稿で、本作の読本的枠組を、刊行されずに終わった後編でこの術が敗れて良門が滅亡するまでと錯覚している。蝦蟇の術は、良門の野心や如月尼の（恐らくは）隠された鬱屈、前記源頼信の驕慢など、人間の誰もが持つ心の隙間に入り込んで来るのだが、しかし頼信に即して申し述べたように、忠義の臣の命を賭した諫言によって心の闇が晴れるやいなや、雲散霧消してしまうものでもある。本作で大事なのは術よりも「諫言」の方であって、その代表として読本的枠組を荷っているのは、他でもない、題名に名前を冠せられた「善知安方」その人である（本作は一応未完作なので、正確には前編の読本的枠組と言った方が良いのかもしれないが、巻之五末尾に後編の粗筋を明かしてしまっていることは、京伝がここで作品を終わらせるサインとも受け取れる）。これは京伝らしくまことに凝ったやり方であって、本作の題名がなぜ「善知安方」の「忠義」を謳っているのかということとは、従来不審されたままであった。最近の論考でも、稿者本多朱里氏は『忠義伝』は、『善知安方忠義伝』という題名でありながら善知安方の活躍を描いた作品ではない。また「忠義」を中心としたものでもない」と述べておられる。<sup>(2)</sup>しかし、本作における安方の役割は、同じく本多氏が、少し後のところで、「個々の事件をつなげ、それを読者に見せる為にいる人物、物語の語り手に近い立場にいる人物なのである」と規定しておられるのが正しい。氏はさらに安方を「いわば〈見ている人〉であった」とも言われるが、これは、本作の読本的枠組は善知安方である、と述べているのに等しい。

善知安方は、言うまでもなく謡曲「善知鳥」に基づく人物である。内容的に全く通うところのない『前太平記』と取り合わせられたのは、作者山東京伝の考証的興味が、近世前期江戸の都市風俗の背景をなしている東国一般への歴史・民俗へと拡大した結果と推察されるが、開始早々、謀反を起こし、下総に大内裏造営して新皇帝と僭称した相馬小次郎平将門に対して、家臣六郎公連が諫死、一子次郎安方は追放され、妻錦木と共に奥州外が浜に下り、漁獵を

こととし、善知と名乗った（第一条。前掲のとおり『前太平記』巻第一「将門僉議事付公連諫死事」を踏まえる）との挿話が簡潔に語られ、両者は、さりげなく結び付けられている。

しかし、すでに触れてもきているように、善知安方は、第四条で、本作の表舞台からは、早くも姿を消すことになる。この場面の展開を、やや詳しく辿ってみる。

——謀反の大家を抱いた平太郎良門は、術によつて如月尼の道心を挫き、味方に引き込む。善知安方は、この時平太郎の行方を尋ねてここに辿り着き、二人を諫めるが、却つて平太郎に斬られ、切腹してなお諫言を続け（「いきなからへて御ゆくすゑを見んもなか／＼おもひなり。寧亡父の志をつぎ、死して魂魄御身につきそひ、いつまでもご諫言仕るべし」）、ついに首を打たれる。良門は、味方を求めて旅立とうとするが、「忠義に凝たる安方が、首なき軀（みづ）おきあがり、背後（うしろ）より平太郎が腰にいだきつきてひきとむ。……死してもたゆまぬ金鉄の忠義の心ぞ哀なる」（傍線筆者）。——

傍線部分が題名の由来ということになるが、一方で謡曲「善知鳥」に拠る以上、亡魂と化した安方は、越中立山に禪定する、回国の修行僧ならぬ妻の兄鷺沼太郎則友の前に現れ、謡曲の詞章を踏まえながら、

さいつころ浪々の身となりしより、陸奥にさすらへ、なりはひとすべき業（わざ）もなければ、只あけてもくれても殺生（ころし）を営（い）み、……身の苦さも悲しさも、妻（つま）の恩愛に忘れ、追鳥（おしどり）たか縄（な）さま／＼に、品かはりたる殺生なり。今思へばおのれが妻子のいとしきごとく、鳥獣もおもふらんを、……鴛鴦（うしどり）を殺せし咎（とが）やらん。逃げんとすれど立得ぬは、羽ぬけ鳥の報（うり）なるか。安方が身をたとふれば鷹（たか）に迫る、雉（き）子（こ）よりも、遙（はるか）に過て哀なり。逃（に）げがたの、狩場の吹雪に、空もおそろし地を走る犬、鷹に責られ、あなこ、ろうとう安方、やすきひまなき苦みを、たすけてたべや則友どの



と、殺生の罪による地獄の苦患を訴えざるを得ない（第五条）。ただし謡曲では「妻子の恩愛」さえ忘れたために永久に成仏できないでいるのを、『善知安方忠義伝』では逆に「妻子の恩愛」のために殺生を業としたと改め、成仏の機縁を設けている。忠臣であると共に逃れたい罪過を犯しているという善知安方のもつ二重性が、本作に文芸的な深み、ないし勸善懲惡の徹底しない印象を与えていることは、先に『前太平記』の美丈丸に即して申し述べた事柄と重複するので、繰り返さない。

さて本作の読本的枠組が「善知安方」であり、その形象が謡曲に基づいているとして、謡曲を素材とした読本ということであれば、文化三年二月の刊記をもつ本作よりほぼ一年早い、同年一月に、馬琴の『三国一夜物語』（上総屋忠助ほか江戸三書肆刊。「富士太鼓」に拠る）・『勸善常世物語』（江戸・柏屋半蔵ほか京・大坂・江戸六書肆刊。「鉢木」に拠る）の両作が刊行されている。<sup>(23)</sup>馬琴の『四天王剽盜異録』における京伝の『桜姫全伝曙草紙』と同じように、京伝の『善知安方忠義伝』に近接して、馬琴の両作の存在が指摘できるわけである。ただし、今詳しい論証は省いて、両作の読本的枠組を抽出した結果のみ示すと、『三国一夜物語』では多田満仲の神霊の託宣、『勸善常世物語』では九尾の狐（玉藻前）の怨恨がそれにあたり、謡曲は共に作品の重要な素材源というに止まる。謡曲は、『善知安方忠義伝』において初めて読本的枠組として利用され、作品構造の中核の部分を占めるに至ったことになる。

ところが最近になって、馬琴の出世作『椿説弓張月』（前篇・文化四年正月、平林庄五郎ほか江戸二書肆刊。以下後篇・続篇・拾遺・残篇、文化五十八年刊）の読本的枠組として、謡曲「海人」が用いられていることに気づき、『海人』の枠組は、無論、前篇から残篇に至る全体の長編構成を支えているのであるが、あからさまにそれとは示されておらず、むしろ前・後篇一二冊での完結が予定されていた初期構想段階の名残であろうと考えられること、同時にこれに最も近接した作品構造を持つのは、他ならぬ『善知安方忠義伝』であることを指摘する機会を得た。<sup>(24)</sup>『善知

『安方忠義伝』も、実は分類の難しい作である。時期的には〈伝説もの〉の流行期に刊行されているのだが、安方の忠義はひとえに良門に向かっているのだから、前述の〈伝説もの〉の定義からは外れてしまう。しかし、本作を『椿説弓張月』前篇の横に置いて眺めてみると、この時期京伝・馬琴が何を考えていたか、良く分かる。『椿説弓張月』は、全体として見れば、名実共に堂々たる〈史伝もの〉として分類されるべきである。けれどもことに前篇は、〈史伝もの〉への試行錯誤の跡を、様々に留めている。京伝は『前太平記』を主要典拠としてこれを謡曲「善知鳥」で覆い、馬琴は、『前太平記』に登場する源家の統領としては最後の人である源為義の八男為朝を主人公とする『保元物語』を主要典拠として、これを謡曲「海人」で覆う初期構想を立てたのである。この構想に、馬琴にとって幸運な方向転換がもたらされたことについては、拙論を<sup>(25)</sup>参照いただきたいが、『椿説弓張月』におけるこうした点を参考にして、『善知安方忠義伝』を分類するとすれば、〈原・史伝もの〉とでも称すべきかと思う。ちなみに、先ほど〈擬・〉一代記もの〈と分類した『四天王剽盗異録』も、読本的枠組の施し方としてはともかく、同じく『椿説弓張月』に通う〈原・史伝もの〉としての作品の内実を有することも、多少触れた<sup>(26)</sup>とおりである。ここにおいて、『四天王剽盗異録』と『善知安方忠義伝』は、共に『椿説弓張月』に流れ込むという、両者の新たな類似点を指摘することも可能であろう。

## 五

文芸様式としての江戸読本の形成を時間軸に沿って把握しようと試みた時、文化三、四年の京伝・馬琴の読本については、互いに対立するものと捉えずむしろ一体として考えた方が、有効で無理のない文学史的展望を手に入れるこ

とができる。現段階でこのように断言してしまつて良いかどうか、今回取り上げなかったこの二年間の他の作品についても同様に検証を経ることが前提だとしても、仮説としてここで提示しておくことを許されたい。

互いに近接し合う個々の作品の、少なからぬ類似性について、刊年や序跋の年次に従つて影響関係を明らかにしようとする、従来の正統的な試みは、現在隘路に陥つていて、例えば馬琴中心史観に基づいてある部分の類似ないし相違を強調すれば、これに合致しない他の部分の類似ないし相違が説明し切れなくなつてしまふ。むしろ、京伝・馬琴は、読本の制作にあつて、勿論常にではないにしても、少なからず発想の場を共有することがあり、それが巨細にわたつて作品内容の類似性に繋がっていると愚考する。その場合、京伝の遅筆・馬琴の速筆ということとは、恐らく事実として良いのであろうから、元来京伝の発想にかかるものが、前年刊行の馬琴読本にさりげなく紹介されているといったことは当然あり得るし、その逆も起り得るであらう。つまり、文化三、四年における京伝・馬琴の読本「競作」は、両者の談合（悪い意味は含まない）を前提として行なわれたものである。京伝・馬琴は一応「師弟」関係にあつたのであるから、それは必ずしも不自然なことではないし、私は、寛政二年に馬琴が京伝に「入門」して以来こゝまで、両者におけるこの「談合」はずっと継続して行なわれていたのではないかと想像している。しかし京伝・馬琴の關係は、必ずしも対等ではなかったと思う。江戸（稗史もの）読本の創始は、寛政改革時の処罰の体験から、京伝において内発的なものであるし、<sup>(27)</sup>初作『忠臣水滸伝』前・後編（寛政一一年一月、享和二年二月、萬重・鶴喜刊）から、『復讐奇談安積沼』（享和三年一月、鶴喜刊）を経、『優曇華物語』（文化元年一月、鶴喜刊）に至つて、読本の枠組を用いた江戸読本の定型の確立されるまでの間に、作品の内実に及ぶ馬琴の関与は認められない。<sup>(28)</sup>また寛政・享和期において、馬琴は草双紙・中本作者だったのであつて、<sup>(29)</sup>読本の初作とされる『高尾船字文』（寛政八年正月序、萬重刊）は、振鷲亭の『いろは醉故伝』（寛政六年正月序、上総屋利兵衛刊）の刺激に対抗して、すでに京伝

の温め始めていた浄瑠璃と通俗本『水滸伝』との取合せという発想を、馬琴が中本としてまとめ上げたものと想像する。しかしこれは文字どおり想像で、馬琴のアイデアを京伝が借用したというのが通説であるが、両者の関係は、基本的には歌舞伎・浄瑠璃風に京伝が立作者、馬琴が助作者と称して良いものだったと考えて差し支えないと思う。馬琴は、半紙本読本の初作『月水奇縁』（文化二年正月、大坂・河内屋太助ほか江戸・名古屋・京・大坂五書肆刊）以降、半紙型の江戸読本作者として急成長するのであるが、文化三、四年の段階においては、京伝・馬琴の力関係は、依然保たれているものと見なし得る。

ここまで、両作者に限って私見を述べてきたが、両者の「談合」の場には、当然のこと、書肆も加わっていたと思う。そのように考える根拠は、馬琴『伊波伝毛之記』（文政二年十二月成）の良く知られた一節、

寛政中、京伝、馬琴が両作の草冊子、大行る、<sup>いたく</sup>に及て、書肆耕書堂（注、薦重）、仙鶴堂（注、鶴喜）相謀り、始て両作の潤筆を定め、件の両書肆の外、他の板元の為に作することなからしむ、京伝、馬琴これを許すこと六年、爾後ます／＼行れて、他の書肆等障りをいふもの多かりしかば、耕書、仙鶴の二書肆も、これを拒むことを得ず、広く著編を与へ、刻さすることになりたり、（新版「新燕石十種」第六巻の本文に拠る）

である。こうした繋がりは、寛政改革以降の京伝と薦重・鶴喜の關係に馬琴を加えたものとして理解でき、京伝・馬琴、薦重・鶴喜の繋がりは、草双紙のみならず、読本においても同様であったものと思われる。ただし薦重は、本稿でこれまで書名を挙げたものを中心に言えば、『高尾船字文』の版元、『忠臣水滸伝』前・後編の鶴喜との相版元、馬琴の中本『曲亭伝奇花釵児』（文化元年正月刊）の浜松屋幸助との相版元を経て、『月水奇縁』の売捌元を最後に読本から撤退し、鶴喜が後に残った。本稿で取り上げた両作を含め、江戸読本形成期における京伝・馬琴の主要作は、そのほとんどが鶴喜によって刊行されていると言っても過言ではないほどである。

先に保留しておいた高木元氏の本屋主導説は、京伝・馬琴の読本の、このような出版状況を背景として提唱されたものである。しかし『四天王剽盜異録』と『善知安方忠義伝』を比較した限りでは、両作の内に、互いに孤立した作者に版元が介入することによって引き起こされた排他的自己主張の痕跡を見出すことはできない。むしろ私は、新作の考案にあたっては、京伝・馬琴・鶴喜の三者が一堂に会するなどして意思を疎通し合う、一種の「企画会議」が恒例になっていたのではないかと考えている。大家京伝と、人気急上昇中の馬琴が、同じく長編の近世軍記『前太平記』に取材し、一方で構成・趣向がダブらないように注意し合いながら、それぞれに秘術を尽して「競作」に励み、その結果、両者の新作が、江戸読本の流れをまた一歩リードして読者の喝采を博するという確信があつたから、鶴喜は、ともすればリスクを抱えることになりかねない類似作の出版を共々引受けたのであろう。ちなみに、高木氏が鶴喜が京伝・馬琴の対立を演出したとされる説の根拠である刊記のズレは、右のように考えれば京伝・馬琴が兄弟作者であることの演出ともとれ、これのみで十分な証拠とはなり得ないと思う。しかしいずれにしても、京伝・馬琴・鶴喜の「談合」による制作は文化四年刊行の読本までで途切れたようで、以後鶴喜の扱うのは文化五年正月刊の馬琴読本二点に限られ、京伝読本は、別の版元の手に委ねられるようになる。この点の詳細な検討は、今は本篇の問題意識の外にあるが、文化五年頃からなし崩しに顕在化してくる両作者の乖離と、やはりどこかでかわっているものと予測している。

以上の仮説は、表題の二作品の検討の範囲を逸脱しているかもしれないが、私としては、前稿以来、京伝・馬琴読本の錯綜した関係に目を向け直して自ずと辿り着いた認識を、この機会に提出させていただいたものである。先学のご努力に対する不遜の言は、幾重にもお詫びするが、通説になずんだための失敗は、もう二度と繰り返すまいと思つてゐる。

〔注〕

(1) 「前太平記といふものはうけられぬ説のみおほかり」(『燕石雜志』(文化八年(一八一二)刊)卷之二「十一 鬼神論」)。ただし「前太平記」の記事は、馬琴手製の類書「故事部類抄」に折々抜書きされている。なお「故事部類抄」は、早稲田大学中央図書館曲亭叢書所収。成立は、播本真一氏により文化五年前後と推定(大東文化大学「日本文学研究」第三三号、平成六(一九九四)・一)。現在翻刻が全五冊のうち第三冊まで進行中である(早稲田大学図書館紀要第四四・五〇号、平成九(一九九七)・三・平成一五(二〇〇三)・三)。

(2) 「四天王剿盜異録」については、鈴木重三・徳田武「馬琴中編読本集成」第三卷(平成八(一九九六)、汲古書院) 解題、「善知安方忠義伝」については柴田恵理子「善知安方忠義伝」と「前太平記」(『国文目白』昭和五九(一九八四)・二) 及び前掲「山東京伝全集 第十六巻 読本2」解題(徳田武氏) 参照。

(3) 特集「読本研究の50年と今後 二、読本研究の現況と提言 1 様式と分類」(『読本研究』第九輯(平成七(一九九五)・一〇)において、ある程度まとまったかたちで解説している。

(4) 本多朱里「善知安方忠義伝」攷―京伝読本の方法―(『読本研究新集』第二集、平成一二(二〇〇〇)・六、翰林書房)。

(5) 共に「前太平記」巻第六の内容を踏まえる。両作冒頭の本文を並記しておく。

・「粵に人皇六十一代、朱雀天皇の御宇なりけん、下総国の住人、瀧口小次郎平将門、関の八州に逆威を振ひ、驕奢日々に超過して、猿嶋郡石井郷の宮闕を営み造り、みづから関東の親王と偽号し、勢既に破竹のごとく、……」(『四天王剿盜異録』第一綴)

・「爰に人王六十一代、朱雀天皇の御宇にあたりて、相馬小次郎平将門は、其為人狼戾にして、礼法に拘ず、非望を謀て朝家を傾、推て帝位に登んとおもひ立、承平二年下総国石井郷の都を建、新に大内裏を造営して、……」(『善知安方忠義伝』第一条)

(6) 「江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷」第一章第二節、五二頁(平成七(一九九五)、ベリかん社)。

(7) 拙稿「馬琴読本の一展開―『四天王剿盜異録』とその前後―」(『近世文芸』三九号、昭和五八(一九八三)・一〇)。

(8) 注(7) 拙稿で、酒吞童子退治に基づくものであることを述べている。

(9) 「馬琴中編読本集成」第三巻解題では、「無名草子」などから得たものであろうか」とされる。

(10) 麻生磯次「人物叢書37 滝沢馬琴」(昭和三四(一九五九)、吉川弘文館) 一三七頁。『日本古典文学大辞典』「曲亭馬琴」の

項（水野稔氏稿）

- (11) 『読本の研究』（昭和四九（一九七四）、風間書房）序章第三節「読本の分類」。
- (12) 横山氏は「読本の研究」第二章第二節「お家騒動ものの諸相」において（お家騒動もの）を山東京伝の読本五作に限定して論じておられるが、現在私は、京伝の「昔話稲妻表紙」（文化三年二月刊）をその典型とし、周辺作にもこれに加えるべきものがある（ただし横山氏が〈お家騒動もの〉とされる京伝読本のうち、『昔話稲妻表紙』以外のものはむしろ除外すべきである）と考えている。
- (13) その中間報告として、注（3）の拙稿を参照されたい。
- (14) そういう意味では、従来（伝説もの）の代表作のように言われてきた『新累解脱物語』（文化四年正月刊）も同様であり、累の話が烏有（祐天）上人一代記の一コマに包摂されたかたちになっている。
- (15) 「読本発生に関する諸問題」「椿説弓張月の史的位位置」（共に『中村幸彦著述集』第五巻、昭和五七（一九八二）等。
- (16) 注（12）参照。
- (17) 拙稿「優曇華物語」と『曙草紙』の間——京伝と馬琴——（『読本研究』第二輯上套、昭和六三（一九八八）・六、一六四頁。拙稿「江戸文学と悪女——『桜姫全伝曙草紙』を読む——」（甲南女子大学公開土曜講座「オルビス」第六集、平成二（一九九〇）・四）
- (18) 中村幸彦「『桜姫伝』と『曙草紙』」（『中村幸彦著述集』第六巻、昭和五七（一九八二））。
- (19) 注（17）の拙稿において、日本名著全集『読本集』解説（昭和二（一九二七））における山口剛氏の説を追認の上修正している。
- (20) 後藤丹治「太平記の研究」（昭和二三（一九三八）、河出書房）後編第三章第一節。
- (21) 注（4）に同じ。
- (22) 郡司正勝「京伝の読本と蝦夷北国情報」（叢書江戸文庫18『山東京伝集』月報、昭和六二（一九八七）・八）。拙稿「江戸読本の文体と『安積沼』」（『読本研究新集』第二集、平成一二（二〇〇〇）・六、翰林書房）。
- (23) 注（24）の拙稿参照。
- (24) 「椿説弓張月」の構想と謡曲「海人」（『近世文藝』79、平成一六（二〇〇四）・一）。
- (25) 「椿説弓張月」論——構想と考証——（『読本研究』第六輯上套、平成四（一九九二）・九）。

- (26) 本稿第三章。詳細は注(7)の拙稿参照。
- (27) 拙稿「山東京伝―江戸っ子氣質」〔解釈と鑑賞〕平成二三(二〇〇一)・九に多少触れるところがある。
- (28) 拙稿「『優曇華物語』と『月水奇縁』―江戸読本形成期における京伝、馬琴」〔読本研究〕初輯、昭和六二(一九八七)・四。
- 注(22)の拙稿。拙稿「享和三、四年の馬琴読本」(第一回中日文化教育フォーラム報告書「日本文化論叢」、平成二三(二〇〇二)・一一、大連理工大学出版社)。
- (29) 読本善本叢刊『忠臣水滸伝』(平成一〇(一九九八)・一〇、和泉書院) 解題拙稿、及び注(28)の拙稿「享和三、四年の馬琴読本」。
- (30) 高木氏前掲書(注(6)参照)にも指摘がある。